

[要旨]

史料としてのハプスブルク君主国『軍人職階表』

岩崎 巖
秋山 晋吾

ハプスブルク君主国の軍事史研究において、『軍人職階表』（以下、『職階表』）はいわば古典的な史料として欧米では度々利用されてきた。『職階表』とは、軍隊組織全体を部門別に分け、それらをさらに職階にしたがって分け、そこに配属されている将校名を図示した名簿である。日本では本格的に利用されたことがほとんどなく、また『職階表』それ自体の紹介や、その史料としての性格の検討が十分に行われているとは言い難い。本稿は、一橋大学附属図書館所蔵の1848年版と1890年版を中心に必要に応じて他の年版を参照しつつ内容を概観し、さらに『職階表』の史料としての利用可能性を展望することを目的とする。

まず、第2章で前身である『軍事年鑑』から説き起こし、『年鑑』が急激に「職階表」としての色彩を強め、最終的に名実ともに『職階表』となり、また民間の出版物から国有化されるまでの沿革を描写した。第3章では、ハプスブルク君主国の軍の全体像を提示する『職階表』の目的がどのようなかたちで行われるのを見るために、その構成と形式を示した。まず、1848年版の目次を紹介し、内容を概観した。次に形式を組織と人物に分けて検討し、史料としての活用法を提示した。さらに1848年版と1890年版を比較することによって、政治的・軍事の変遷が読み取れる一方、史料として後退した面があることも指摘した。第4章では『職階表』の史料としての利用可能性を概括的に示した。具体的には、軍隊組織の序列や将校の昇進、将校団の社会的構成、そしてナショナリズムといった課題を提示し、先行研究を踏まえつつ、『職階表』がどのように利用されてきたか、またこうした問題群に対してさらにいかなる可能性を有しているかを探った。